新板
竹佐形入
繪入

源氏物語

六

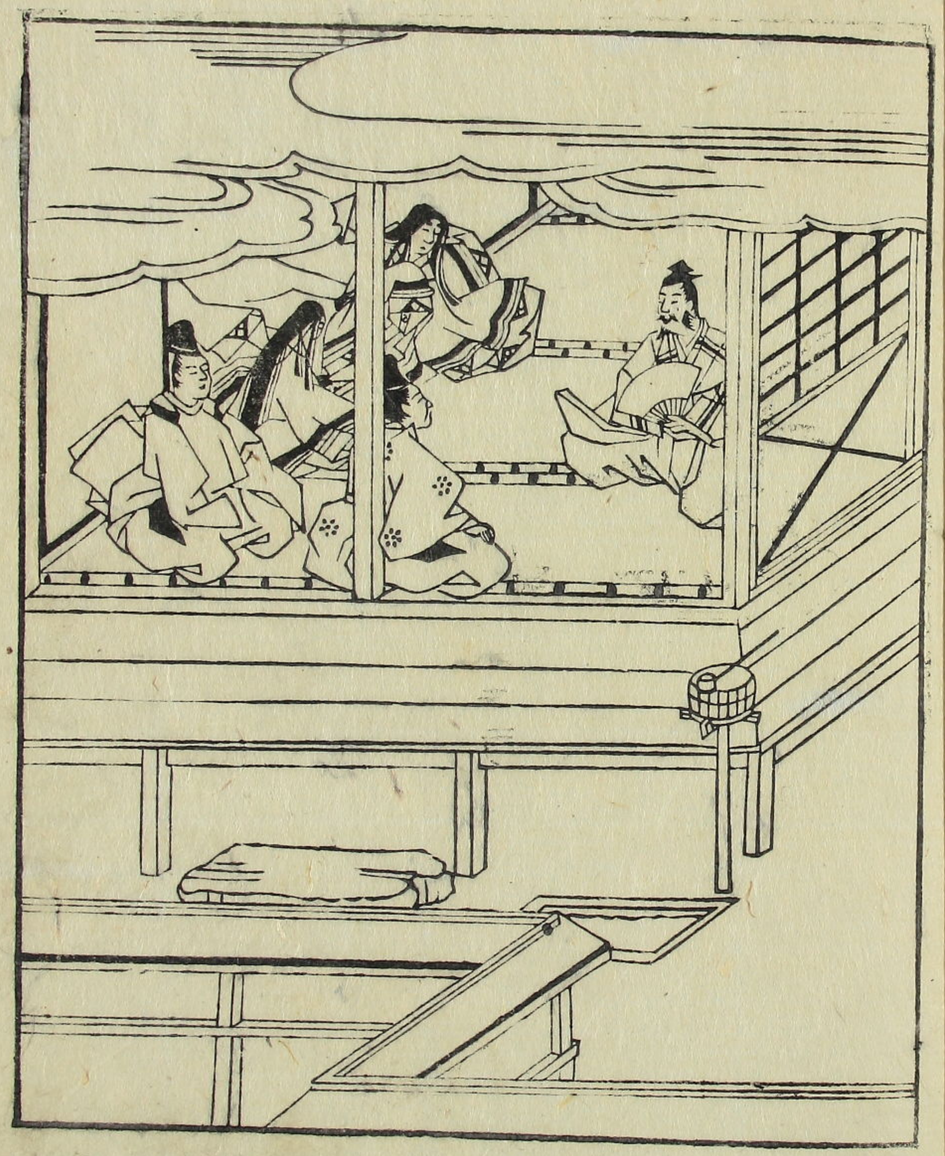
伊地知文庫
文庫20
397
3

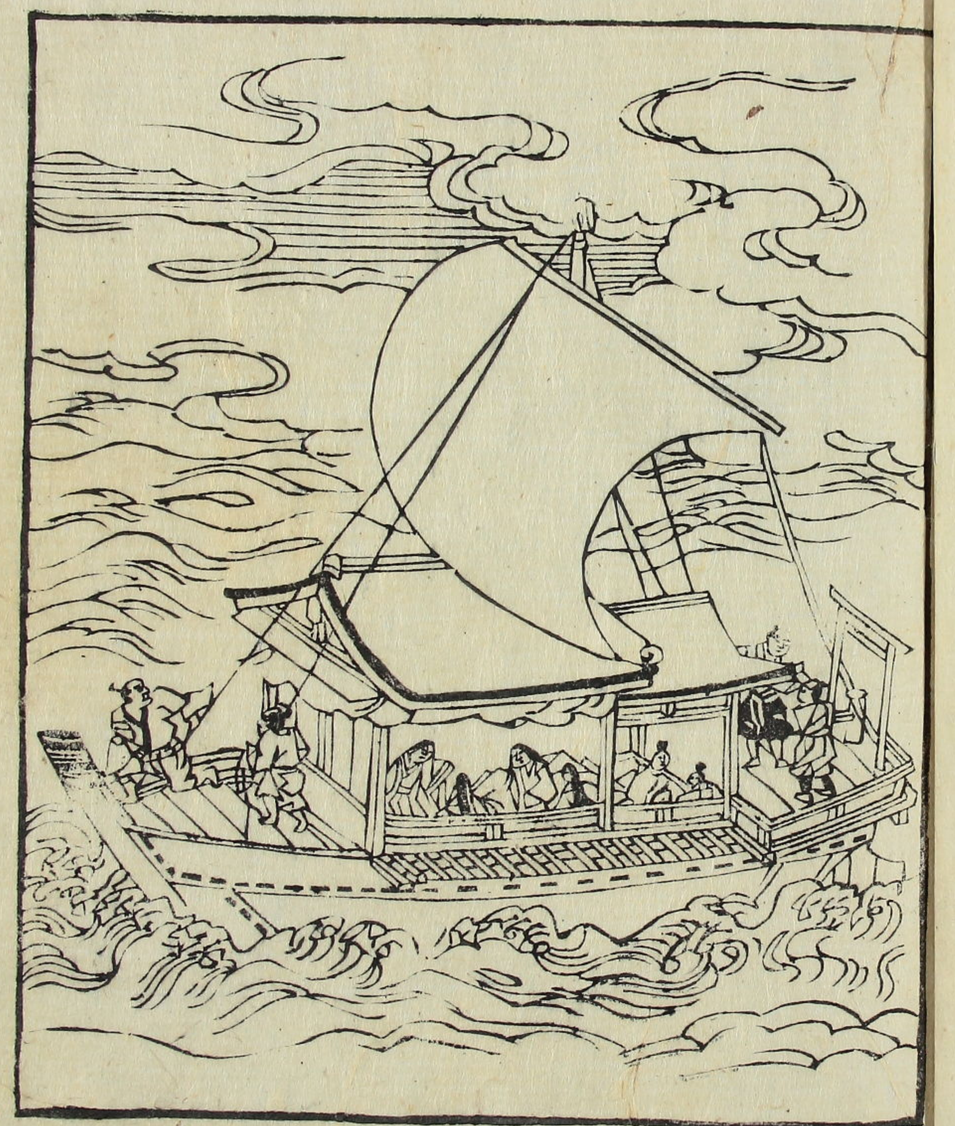
5

伊地知氏蔵書

おつゆを妻にしてもらひたいとのことを
世話をしてくれるやうにと思ひ武士をもとめこま
こんはありがたい姫君に高へぐてうろうろ人をも
さうせてまつまきといひく姫君さうろうろ
お武いうやあ高へのうんとまれどゆめにもお
乃人おもてそどうのびるまでのまるで年
月をとしひあるのかうしたまとうるうん
きてひうんとうのあるとれるかるとにお
うもたあまかまるまるまるいうりいう
お武うまるしのこもれまるたうあきた
高へのこいうねぐうるれ姫君決をうにお

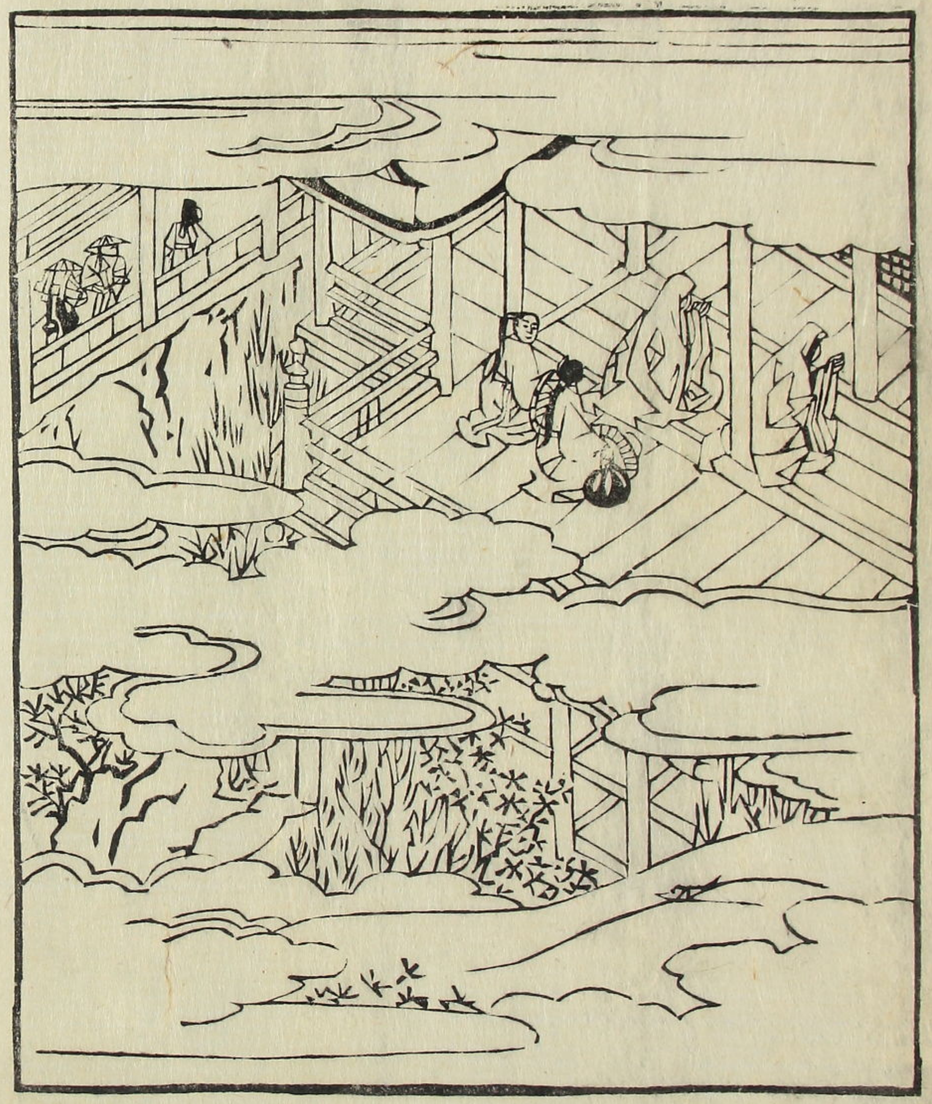
きのひどしたのぶ大中のげとて年三十
ぐうにくいきかひうるはいまの
わりしあうれまかきてたいかるを
よおつまきとをいぐれはげてわうて
のあとおりんとを移んぐうにいくうの岡ふ
きうあ武うまるに二郎と三郎高へ
ゆうをのたうあたのうかんとおりし
ぐんぐのとけとて高へのゆぐんう西うを
高へのがせたてまうんうにはげんうわうと
まのをきうに姫をんをうそめおを
おく賢をあひうまげんうまあとある





九条に菅丞相へおかたよりくのまかは
おまへても筆をたてつきて八幡まうでして又
ありせへまいり口ととりはぢいちらの一段
つきうけ菅家の文まれ物こと母為とひとも
てはきうりこれは菅丞相の御ことは御おさし
おとし苅屋のとけ姫君のまへりものかうう
こうかのまつお太ををもうつのきえみ道は見
うかやなるかおつきしこでうえ母のおかお
よくみ道たちもおもて別にはく右近
かなかぬさし也ば三条は右近がみちて
あるともやりくいゆかつかのよれおかりまと

やとりいくおく右近は姫君いと心ふかれとうり
はおしいかそられ菅のもらして菅丞かさ
つきおひ見せよつけ紀くもとうらんは姫君と
うらしと見えはう三日さきりは御覧れれ
たかうて御おりし心さてみおりこまのりもく
さりとの枝のたらかんだつねとは
みかり川のくよ君とも見えましや
おもうも付せ川もやくれ事はちてねても
家のおきさものゆき人すずれた



汐ヱ船がよみて春と秋とも浮世の風さび
しげりてあらた緑り海うつくしく紙ふくて
さひさう月いろ見えて影ろう
いふ数ちすらば其子ひきつらん
春は霞しいくつの春やぞくとふ色も行て
ちりがのいてきもんう紀ろえびゆえ比こう紀里
別くうちのまだれさといむくさ今の三桜元見さ
みなの法やらうちおりぞへてあしれひや若
あさ取のかいそうあぶさらおり花く
花ぶの雲山のあきれ法さんずあうつ柳のそうを
まかろくさと母ろが書つむて子うちが方う白さ

こうろ紀は常さ法やふ行まう加さねく明る月の頃ゟ
う川世見のおまえかしおとふゞの色り物思す
乃ゆぞゆう文をへ入之書つむい春の池にあり〳〵
きそてみまはうるく花わうつかうをゝを
うへ〳〵割りてん神を見じとく
山谷しやまふずむ此おうさ雑になけておちば生げ多て

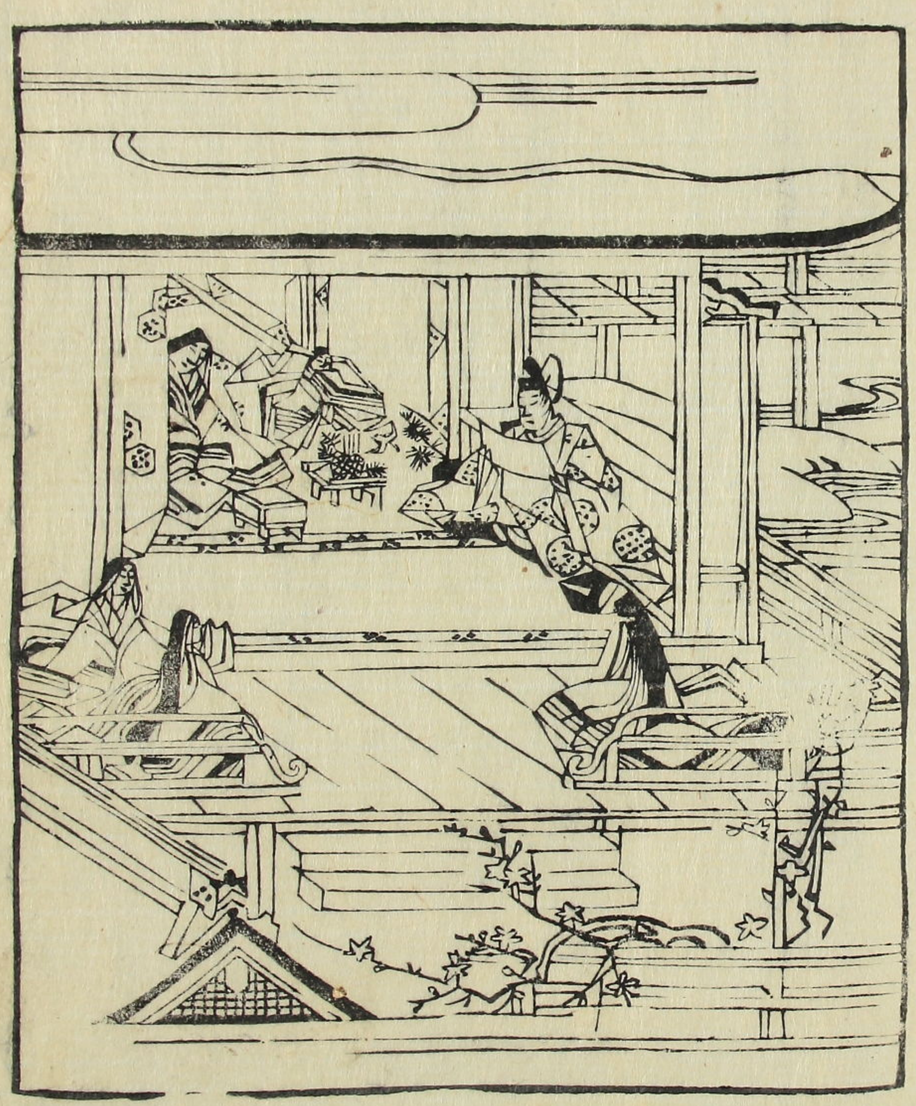
神首　深水亭　元日礼の記

大宗流此用見ところおもはしかるべし弁へ置ぐの
おまへなりわきく梅みもてその風まうのよ
ますいてやまうらめはるの人こゝわかや

かくまてねひたつハ姫君の御ゆくすゑもうらやましく
おほすはいはけなくしうやうかなしく
ちからなれはまちかねかすみもなひきてものかた
けしきはいとあはれなるにつけてもあはれにおほえて（深）
まつのみとりを上とてふたつ引きつれつゝ
あまたつれて遊ふ事のゆへにあそひて深
うすこほりとけわたる池のかゝみには
世々をへたるかけそなりける
（きさきの上）
くもりなきいけのかゝみによろつ代を
すむへきかけそしるくみえける
其日は子日にし姫君の御まへはわかきやうへはいとゝ

ちとせふへ（かく）て御前の小松をひきつれあそふよ
おもふ人つゝみかけこゝろとめさせん松よ
こゝろみにてもおなしかく
とし月を松にひかれてふる人の
けふのねの日のひとつもせよ

姫君
ひきつる年ハつもりて今はまの
まつらしく松乃ねをこそまれなりや
きみのみゆきにむつましきはあまの契ならは
いのりしはなくいつくとも絵かゝれ
ちよふかき契をまつにゆかしとも
姫君の小松の色を見るものこ



大ざつ

やよひ半のおまつり春の都人の花のたもとのまつ
山のこずゑ中頃のさくらはなかざしやかゝるかゝる
手つくしも花づきかへして船のかづくりよ
おもせ結よ舟のむ中をいかゞしくこゝろに
ふてもしやきさのかへて女たちしらみのも
てあやしさうしげきこゑおかざりきうつくしれ
きわらえへとかづらきさを所も草花池よ
と都しゆらんせきを結よ　女たちしち
風さけて池の花さへいろみて
こやみうしたてるやまづきのきれ

春の池や井手の川風よかほるらん
きしのやまぶきさそふみへて
なかれもよし乃山をたづねし舟ならに
おりやのみなともさくらにのこさん
春の日あそうにさしてゆくゆくも
所のきぬくも花をちらしける
都人ともみぎりはるさや結び袖よ
いざはかへり内のりてみちもれのこれ
のこりかづくめんめしくかんざしやたこ
こちみふひきよせさきのうらしく

むかしあるところに
おじいさんとおばあさん
とがありました
おじいさんは
やまへしばかりに
おばあさんは
かわへせんたくに
でかけました
おばあさんが
かわのほとりで
せんたくをしていると
かわかみから
ひとつのおおきな
もものみが
ながれてきました
おばあさんは
ももをひろいあげて
うちへもってかえって
おじいさんと
ももをたべようと
おもいました
おばあさんは
ももをまな
いたの
うえにのせて
ちょうどに
わりました
すると
ももの
なかから
ひとりの
おとこの
こが
でてきました
おじいさんと
おばあさんは
たいへん
よろこび
ました

思ふ事きこえさする人はしらるゝにおやかりたく
はゞかりながらくまゐらせ候のくちなくや〳〵に
うれしく文乃白にみかり
折をみて給ゑものゝおわかれの
御ありがたさ山よしなに候かしこ

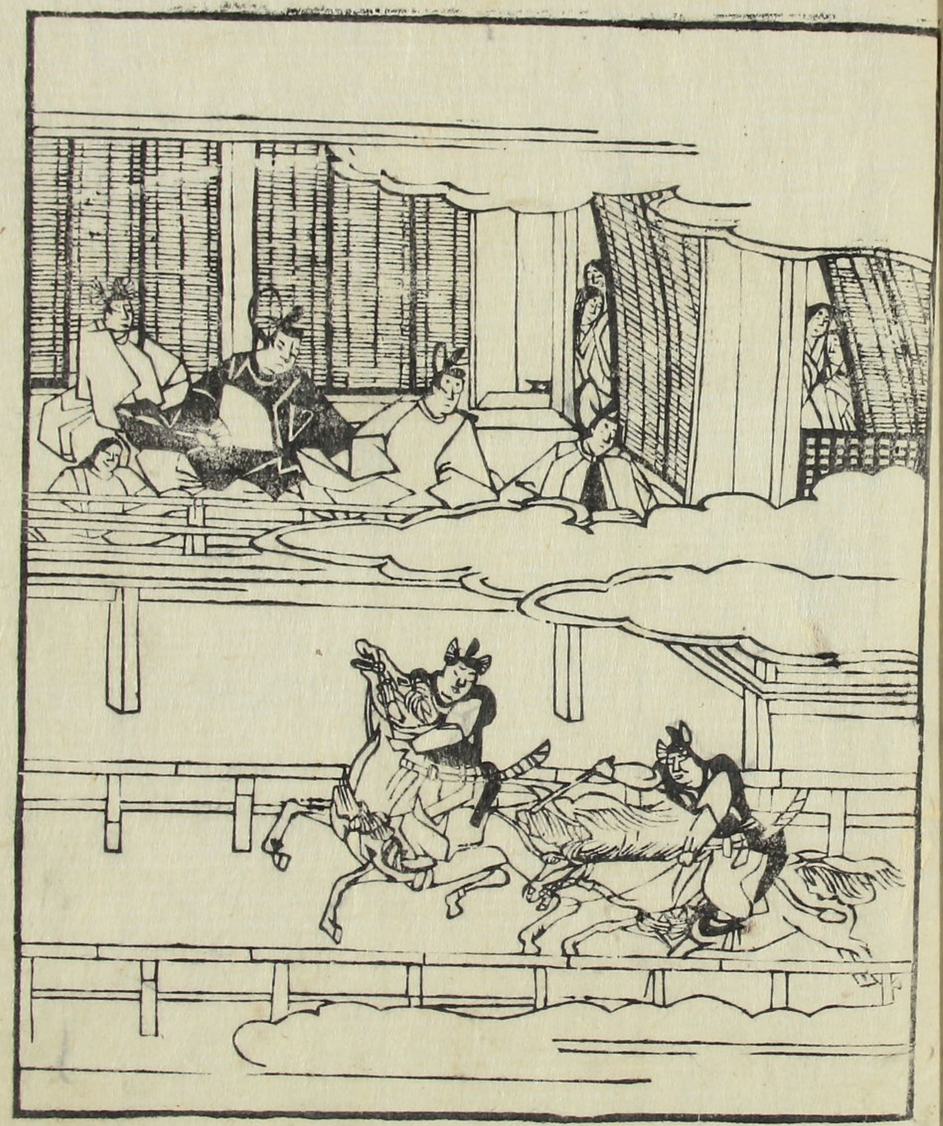
かへる　五月

むかしは御思ひのほかに案じまいらせ候ところ
めづらしく御見まいらせ候わたくしもさぞ人
ともづきおりは安じまいらせ候給へ思ひ候て文
さんざらしせめまいらせ給へし御悦すかし

給へおり候ものゞやうしおりまいらせ候おやかりに
下されそうかるおりまいらせ候まゝおかしき
ひとつに御申とおりまいらせ候おやりまいらせ
とゞしおかしかりし御まゐらせ候まゝむかし乃
御事とかずし給つかさまいらせ候て

こゝろはおりて御まへのはむかうあるはか
御しまいらせ給ひしおのぞをよび候まゐらせ
なくおもきさまの事御おなじ

人乃けりいまゆかりのかは
むかし
おりいせまゐとのこゝろもおはしまして
いとりまへらおりへなりまいらせ候



おもへば葛城の里にかづらのこもりとハ聞えし
まことおしまゐらせしは　葛城の里

そのこ神もすさまじ菓子にさそふ
香ざりのおやめけハやらきつる

涼

みどりにはげとちるづるわごめへ
い川にあやめうさきわかれきき

おもひまゐらせん

をしのあまり暮れおもひたづねねて
おやりきしけりあきさんしをき

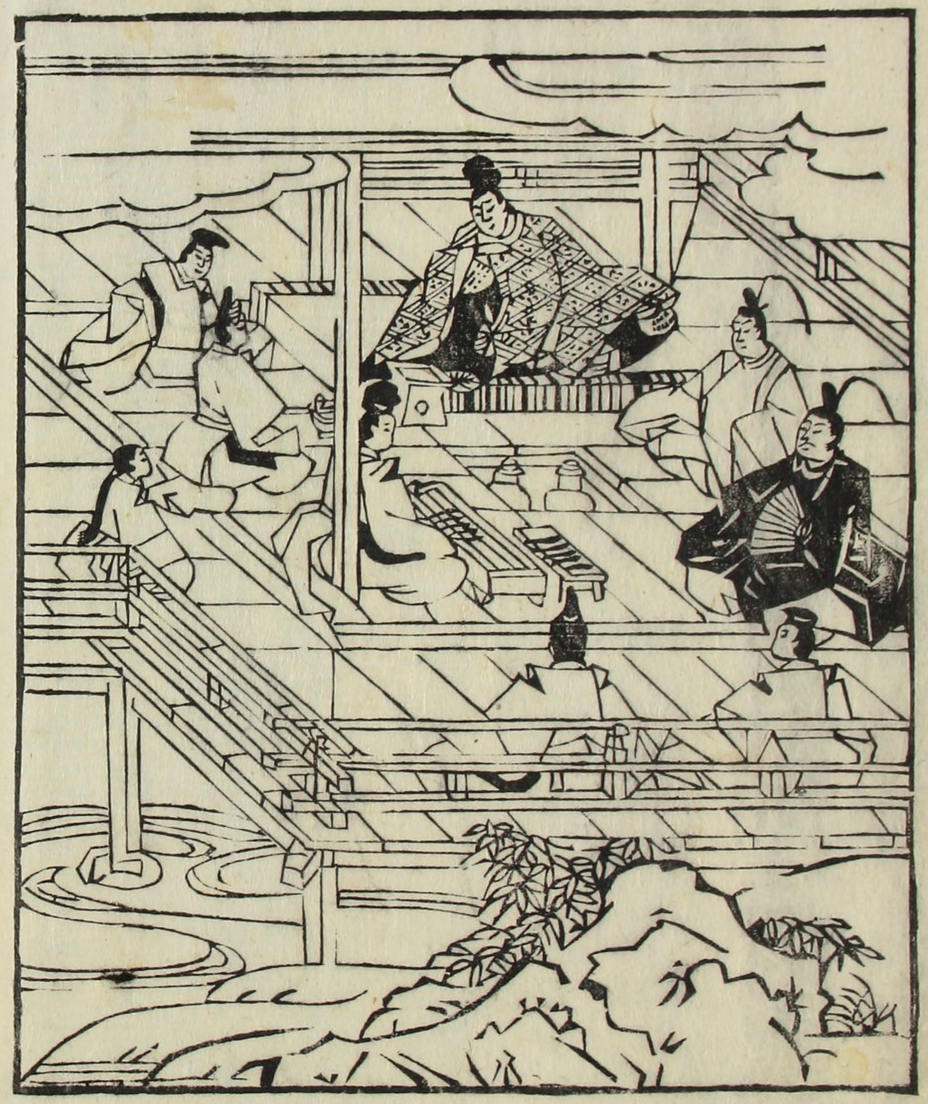
まつ

かよ絵とたてかけげみなりけり
この世かりかりあやめらうい

中乃おもふは時節中より葛城中に住まりて
乃中ゑいかにしていりの涼乃
中さもの時中あてはばげて時中さうり
ゑしさ中れまのすき人あるはみそで
めあへとの雅上

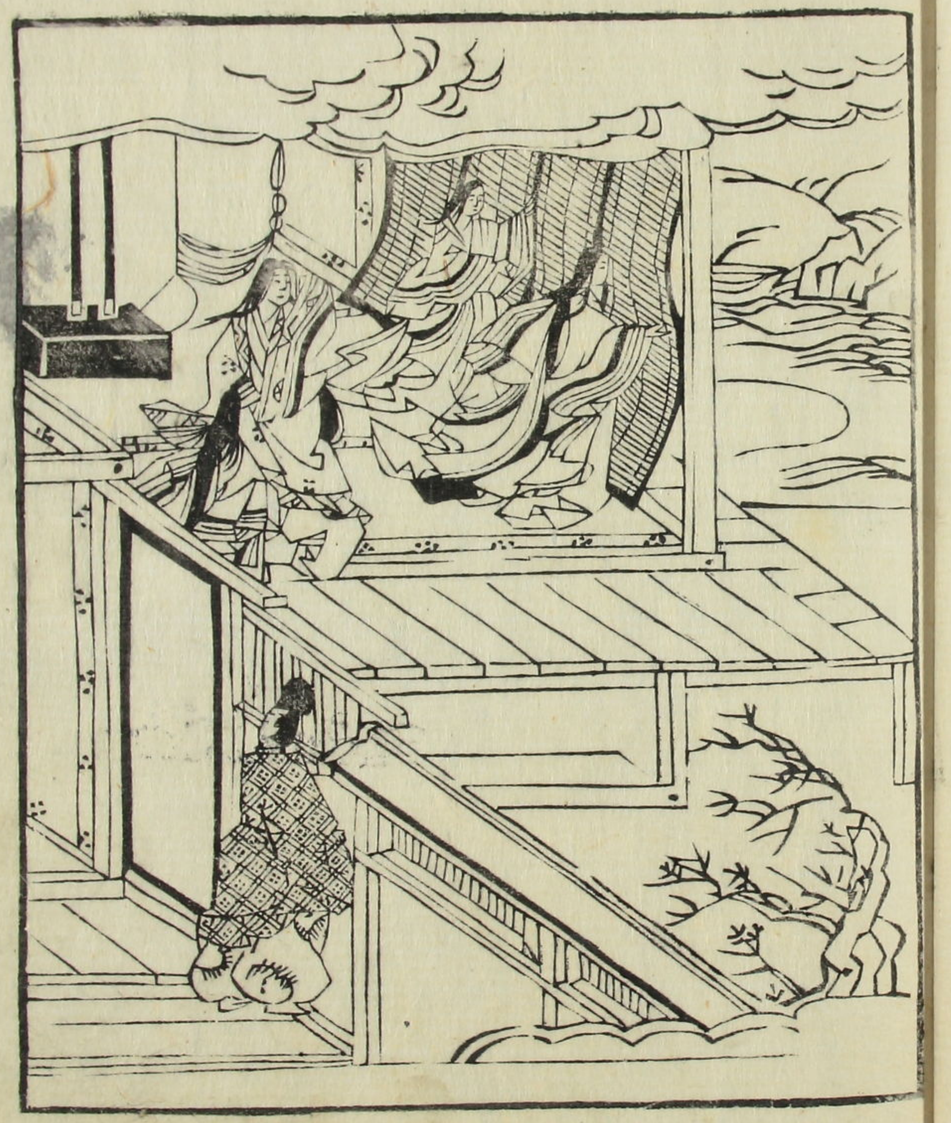
とこなつ川　日六月

はとあつさ日出でるのりん九条のほとりの小
あらくすだ狼上夕霧涼し人もおまる
多り殿く西川よりわかりかなり川のりげつ
たて中つりおゆ人してせし中つるさ



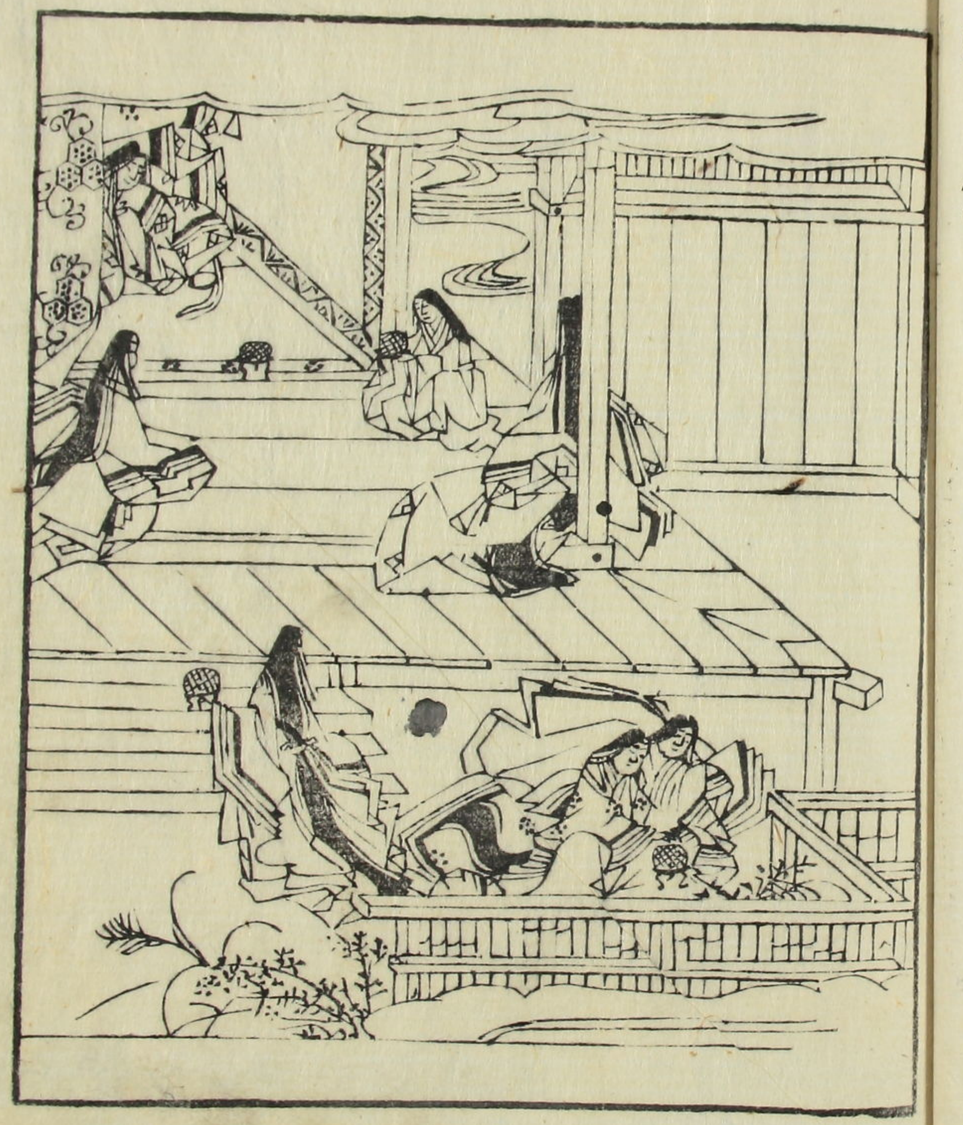
かゝる史人 同秋

秋乃たゝ川清きを立ち出て見れば
紅葉の錦人はくわんとて宝
うゝ史人ゆもゝ四季ながまらぬまつ
たゝ立ち紅葉 源
玉ゝ史人にうゝ一番の物ゝ
うゝ史人せのものとなりけり
ゆゝ名ゝ宮にうゝそよ吹く中の
たゝりに立ち上げ下とかゝ上



野分　月秋

中宮は御琴をとりあてたまへるぎぼうし
乃まへなるはぎのいとをもしろき
あらしふきぬべきけしきなれば
すだれをかかげ給へるに
ちるばかりのはぎのえだ
まことにたをやかなる人
あけがたの月の
ん



夕㒵ハいらでむつれならさえてなげきしま
丁ひきしあげ給へバよく見つ御前にはむつかしい
おやみこきこえかゝりかしこまりたまふを
とあやしと見るにすゝみてぞ給ふとひき
をもうつにほのかなるこゝろにて名残とどめまし
かうあらいでもいつしか家はきこえたる御すゞ
あさやかなるさ御覧じてなまめかしくもうちゆるに
家のひきの上君は人にもとうりたまひてみるに
見まてさるほどにたちふる西のくおも御はしやま
ふきの屋こえられさうらひに露かゝれなる夕
ぐんなり　むかしかう

凉

やきみなる風乃家に月をとまるへし
ちりきしらへきしあらひをきまし
下露ふなびかしふぞとまるへし
あかき風まはまちきさえしし
姫君の御こゝろ夕顔毎に給ふ月硯
ころもかの庵へいつかうて給ひ
風さいぎしも御よりゆく今へのを
わけらくまゝのくみまかれなる君

千ゆき　凉北六七才

三日まし大内殿より参りてそ世よありふる人たく

見さいで六条院の人々もみ物にまかりけるやうかる
みでられたちがあさ日にあたりてかゝやく川乃
りしまて御見の車ひまなく立ならびて
道の左えんさき二ちからかわら屋のかけ人々さ
せ?よもうつくしみどりのうつくしくれなゐとみどり
ら人おくて見物にひけるの大将やあぐるとりく
あふらくひげくろちかつきて見えず御（添）くく
そ御あまるあはれでげにみきくるめでたありぬ
みかどらか御後は殿人のまえはんのぜいきりてへこえる
御雪ふかきしみてゆふりたれはきえけれ
かるきちらがをけいのたるるよ

詞 はるし

さしも名山千ゆきにはれおろ桜ざくらもいく
けふぞちりたりおしやたそうらん
君もろもろ人まのうへいざんまも給へ
やまやまづ人々に御給へまやとの御文に御返事ま
うちきりし朝くりけりしみゆきしまい

詞

はやうしそうれひけりやいなし
あかねさすひかりいそうにくりうのかね
なまして千ゆきふかめときまうしけん
もろうれましあかりてんと詞して大しあへ

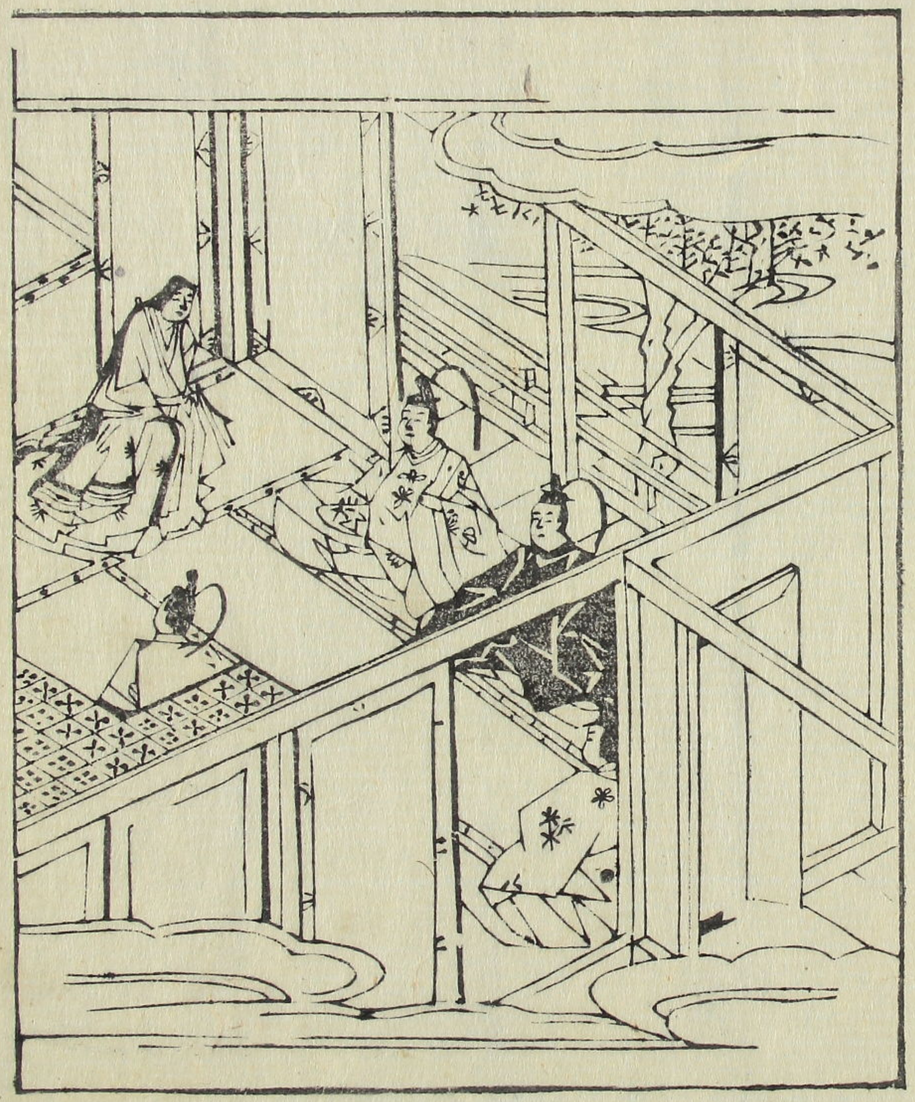
詞

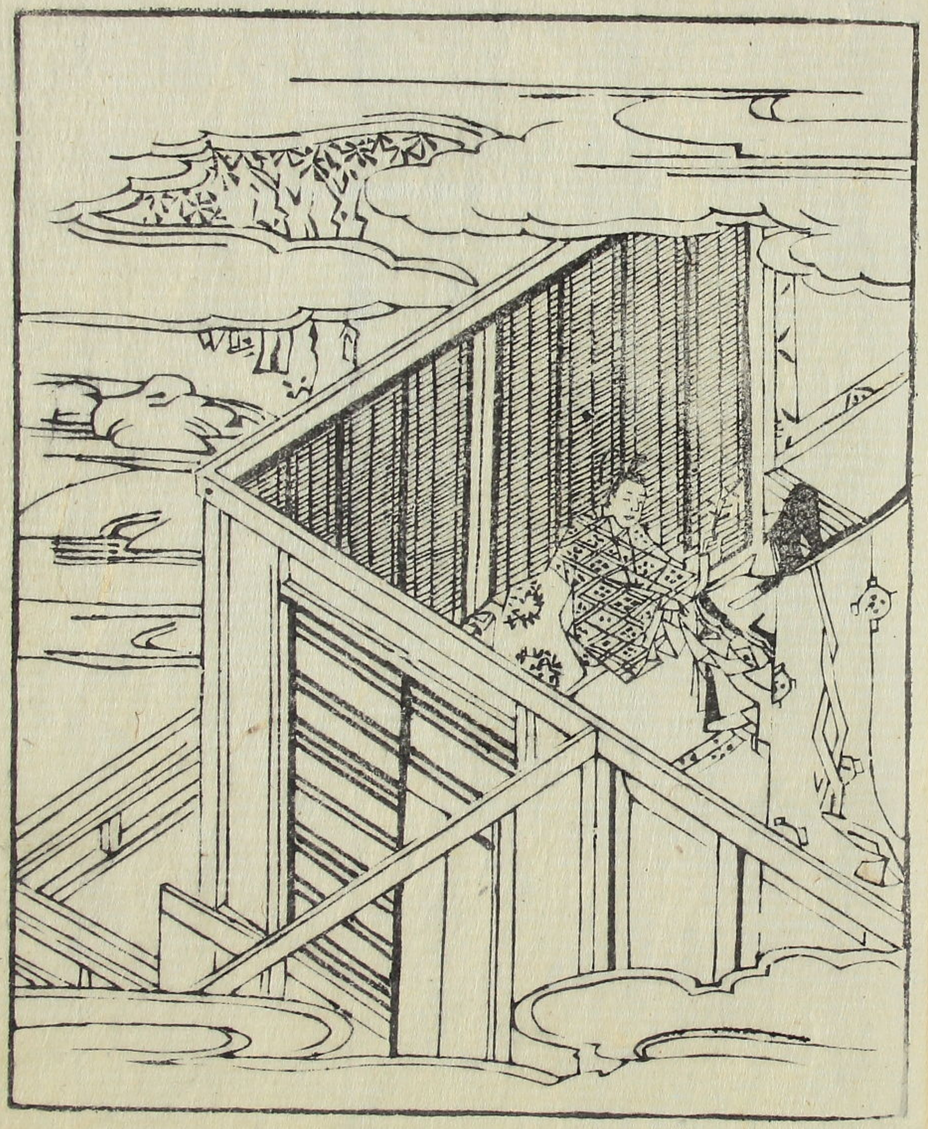
詞らくわかり給へ（あさうの御あし）あさうの森に御事大臣
かくりかろうり御の御くも春さまも気かり給く

かくしけたひくさのばもろうれ御事かぶり御気へ
く御の御くやうくして主川千年き給ふ
御ぞりのくさ御事もちろうと御りき八二月十
六日こさぶあ給へ陸つゆいい父御ぶ御を
御をも大あそうもろく人に給ありの御文をい
やうさにいひまでゆけじまくらけ
わりあらそあとへかけじなきもり
れらのひ中あろう思いつきつゆくあけ乃
志やうぞく御うしかつのたきもや入てまり
かよまつひようあとふびのゆきとおうぞ一のさね
御ちぞりみなも御むものちまりの有ら

あはれなりしこなたの人こそ今はゆかしけれ
わか君はいとうつくしけれはかなしうて
見たてまつりしより大人は
おくれてのちにはいそきて
かつはうれしきを又まつ我おもふこゝろを
父もかくおほゆるまゝに
御のおほいとのはかのむすめをもてなしの御おほえあふれて
きこゆれはいとゞこゝろゆきてまたうれしく
ことにやむごとなき御かたちもまさりて
いとゞうつくしげにおはしますを
あはれとおもひかへして

よろつのことをかつなくさめつゝ
あけくれたゝ御ものおもひにしつみて
御事はおほつかなくおもひきこえて御前のおほしめしは
かくて中納言かくしもいはれすとて
ありし殿（内大臣）はれいのまゝにけしきも多く見せ
とりわきしなくうつくしみて御かたへも
いそきわたりてきこえて女御とのにきこえ
中納言こそうれしくおほえてうち
とりわけ思ひつゝはかりてかたみにかはし
のちの人はなおしくはかりて中納言との
つけさせたまへるはたてまつりたまへ





[illegible] 保元七月八九月

大文ハ三月廿九日ハ[illegible]
[illegible]
[illegible]

夕霧
おし歸れ藤やつてかなとかま
わらはいけよかなしてうりうを
おつう
なみあふちにけき旅人の路すけは
うけむらきかやうすてる涙し
とかく男中にかかまかりおかきやすさて
おつう
文今日は中将文がつまれ旅て来て
いまお山すきからとはたづねまく
どうしてのちにつきまじいけり
おつう
まづいけつそうとはさていま山
たらくしきた道をすまぬし
ひげ宮の太将がゆ字中将とつねまうさく

文がらにをやは道太郎のいかが弁のとをせ
きくの殿のにたがうして毎れ旅ことせめて
太将
稲すかは日々いのをせましかり月に
いのおちつきがとはらのさ
宰相
頼日とひりあみくもまきく乃
とまけれ宮れをけまずをかめてらん
かれおんとおのはを地ゆかすかお
いきぬましていきまにせん
ありそひり手してあうひなさてり
おさとく宮都をの道やいかかいるし

まき

ひけどもの大ぜいもりうとれ事又なりとゆゆし
きあれば人大ぜいの人ものかんなんなりとも
いとおもうて大ぜいもりうとにたりて
事ばいとさぶらひてのかくもの思し
ものとやうにはてかの大ぜ
乃ものひとりとおもうてもりうとにたりて
かやまもりげにものもりうとにたりて
もりうとにてしんし
ものもりうとにてくるまをわりつけ
人のもとにもりうとにて

もりうとにたりてあるものとこれをいてなんが
ものもりうとにてきこえなん
大ぜのものとおもうて世ふかうもりうとにたりて
とくおりけるものの家に年
ものもりうとにてくるまをおり
大ぜのものもりうとにたりて
おりうとにあるものとおもうて或人をまき
りうとにたりて人をわりてきこえて
ものもりうとにたりてあるものとこれ
ものもりうとにたりてあるものとこれ
ものもりうとにたりてあるものとこれ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

小乃そなれたるこゝろ無君ひとり十二月
二人ゐるなる夜ふかう中将行平民部卿
をもひもとめ給ふ事ありけるに
しるき姫君いうまそ物をしるひてしるる
給ひ物をそなれたるこゝろ
事なれるなれ戻ひ給ふ
ものをそなれたるこゝろ
そなれたるこゝろ
とゝそ宮ものこゝろ
ものをそなれたるこゝろ

中納言の母

[illegible]
[illegible]
のくまもとく 印

なごそうをいのひこまもりかん
[illegible]
いうまんいろのむまをなを
こうてこうへいきやけき
大名もこうをかぶりて車
もそこうの 印

九をにこまをそばひのこれ
こうかごうをみのひこごや

むかし　かやりは風めを嫌てよるのえんう
たちまち昼へきさふかいをしくとも
あといへるにつきて去年なる人まつる二月
寺あつまりてなるふおしく哥ひかりそ
ならびりく人丈はつかさく
かきたれくのつけきこゝろのまきて
つきとし人をいうきめつや
むかし　なるめする郷ぬまつくふ御めまきく
うらさく人をきのでけくやや
おくやまつきぬおりろきば見えすけても
寄見まし井でぬ中みちゑさ川とを

いちぞ起こつるやまつきのまきれ
かりの哥かくはみえありく　源
おすすたにてりしかいのみをあらす
いらさ人乃ゆりふうきうらん
去郷見てりく陽也しいかそうりく
すゞれく郷めをわりのまかれ本然
い川かくまりいそりかくさ人き
青りし付くまうさ給ふ文おしくハ男子風う
なく哩まくせとしろひしつき給ふいろまつ
おりふあかんまさ人あまつこ文字も好れ
乃中さふ都の日まくへてわきいろゝへり

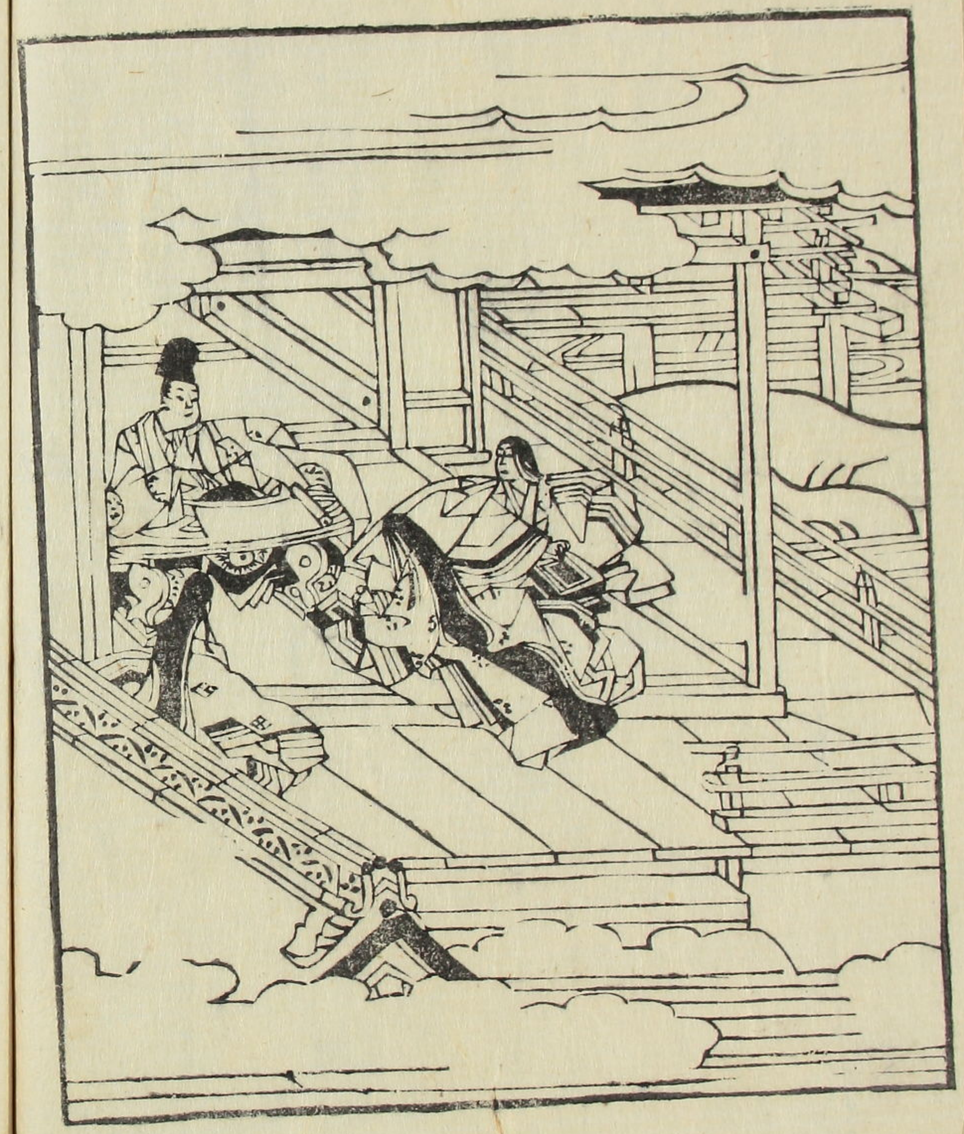
梅がえ　深水のたん

さもさやくわんのみこ十二才にて二月ゆかり
のけれ半あえしゆあの姫君十六才入内ちかづき
け建仁二条院のりくうあいさせゆかよいども其
ぐ看るも昔ゆまの乳すくへゆるとてにくえり
たきあ二人さつ会させ姫に御かくいふかり
ざしくちもうへせんさいあんより御かのかずみ
入て栢梅をしるむすびゆ文そへて参らせつ
紫のまいちかうえさしたとまいらねど
うつりんかもしおさく志ま見えや
深　紫のえにいはしらぬきたりうる

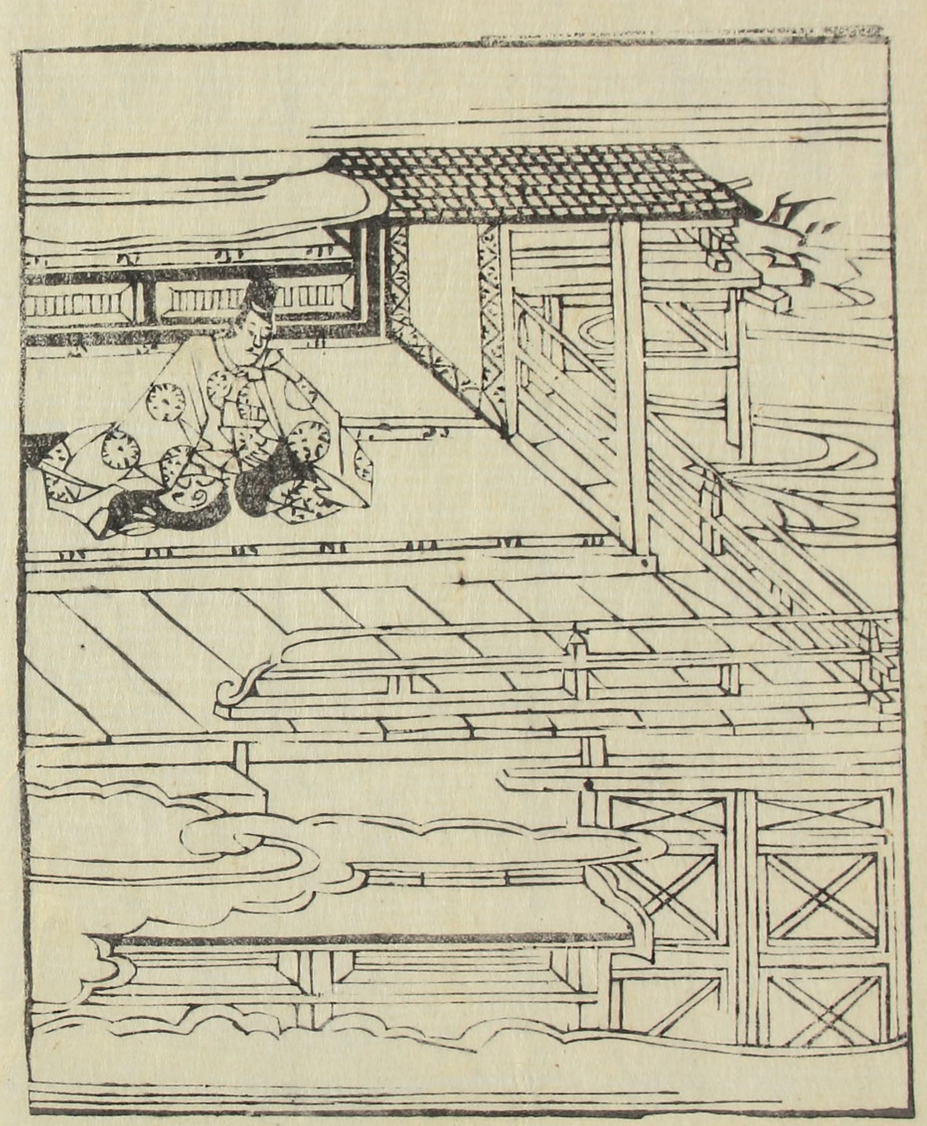
人のこゝろん書とは法あれと
おもくれ二人さいえあのさくあの方にわかつみぎり
ちかうけやしゆうにそうへんじやそうし
わとさゝあ姫へさいのんの是寿おとくれ御経
たゆのよの梅花とまつわかりのとめでたさへ
すみのゆるさかえて紫のゆるさくのえくて百ず
かし合させくて姫君のれりとのうらみ
よゆさくつりの声やくそくしけりがとりあさせ
紫んかれ乙やびておくくはされさて桜井の
らん夕金乃ように文そへ弁めぬひやもしうらく
梅かえうへひとまつり

春やく
うらはまの空てや はくめぐりけん
心きよみつる花乃あるりけり
涼
名月をもうつろふにさの末
花さくや ごか聖まきをおくらん
吟向
うつひとの ねぐるれえことをたのくまて
たかひとつことやもよるの上え行
久秀
紅あらく 風乃らぐあるる花れぬう
うらあへのあまて 山ふやまう人き
弁右衛門
かすえふ月こ花とか色ぶてえは
我ぐるれもこも聖ろひあまし
黄あくまへくるり終よて賑りしたきめ二つ

たてまつりせ給ふ 文
花のまおえそうの神しるつるそて
さそあやまりし いをやさしれん
涼
めうらしと娘うきし人 もまらぞ乃ん
花れめ しそれきく色かなる
ゆかりごころは植うのむ中えれ明うふおくや
つきおほよ むよ様のうちはかつつそに伊与めしへ女
いろんあうく情の袖し跡をたてまつり所
毎あへ みえはかうおりめけ見さそてまつるあ給
いそじと おかりのくり



四ゝ
ゆ
ゆ
ゆ



源氏物語

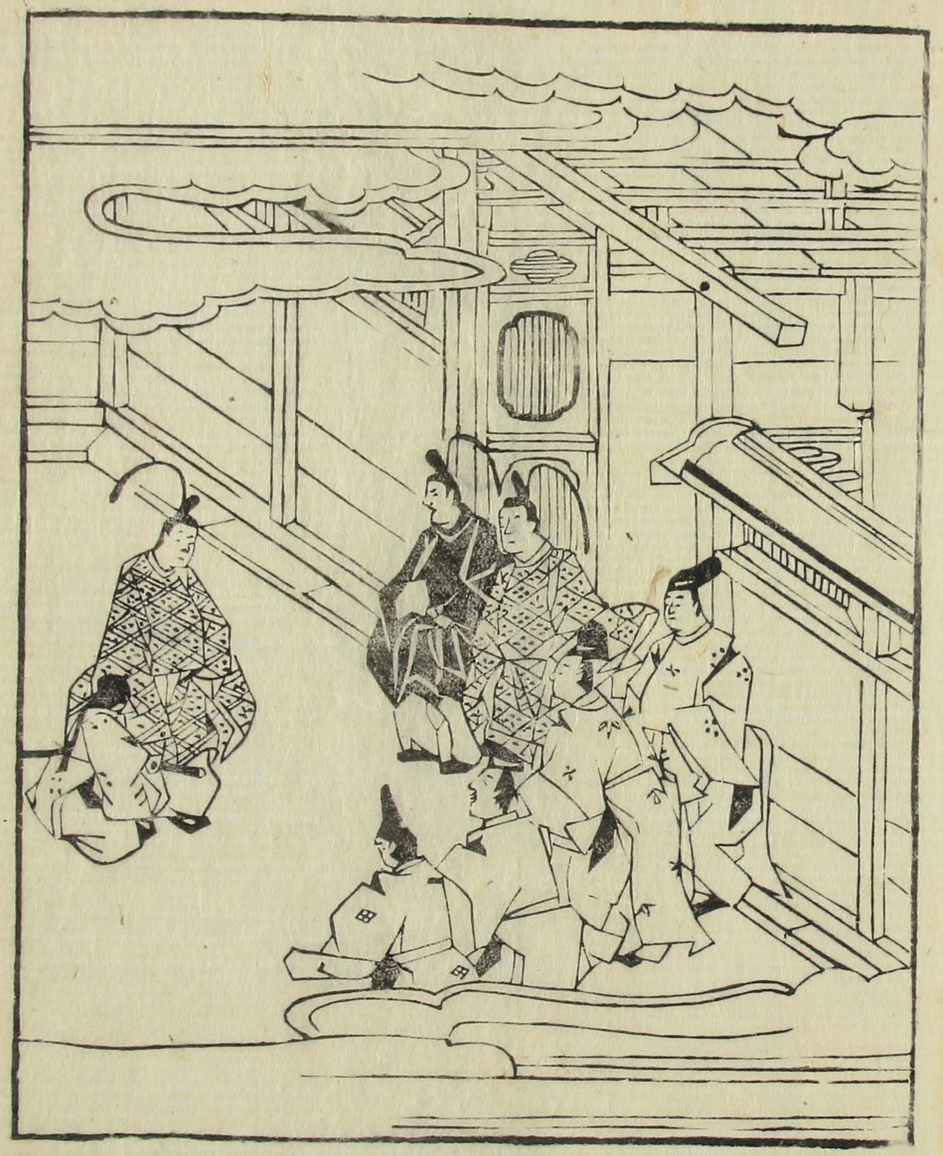
[illegible]

拾遺

[illegible]

[illegible]

[illegible]



たつのやいこあまたのごうなん
中くにおりやまどうん山ごれを
ふうとと叫のたづくしくは
夕暮わうり姫へあまれまうち七八人
もうへとわくいまとそまつとおぐたなを
しめひまの元をかけてちろぐうう
りうれば元のひとりまにきかうれば
あまとくなつくゆうにまりてそ
すわういまみきまうりあるひるとを

おくもさえいしても落れらしおとおどんし
内匠
行へて坊中あ一ッさおりて門並に立ん久し
むらさめしかざしてかけん落のそれ
夕菊
まりょうすぎてうきてけむとを
いつそう露けきしまぬるしきさく
落のひとそく おりておつらん
松翁
たとやおれ袖ありまくつ落れがふ
みらんりうやいろをもさらん
夕菊
実おけゆし措し宰おの哀そそるやこさえ人
されやすし家りしめよとて入 夕子夕菊叢
ことおりして

廿

あさがお花のおくしけつ川くらを
いつさうし、せきれめらうさ
まかしにもろくきこれせきと川子の
ちさくたりのいおかやほうさらん
れくされぬの中あさらいありく夕菊のはな 旦侭
とうむなよきのけしさいりみもたゆく
けよおくつく袖の色けくれ
架菊のこあまの門往ハとしるいのをけし
山林さがく夕菊ハといれく
なふくやけよのかざしにかい川見つ
おがくまそにかまりみけりらぬ

藤内侍

かざしてもかつたどらるゝ草の名は
かつらをおりし人やしるらん

入 日もむらさきのゆかりにて葵をかざすと
して惟光が女とは内侍のすけたちまつり
好てもむらさきのそてたいらんしぬくしやうに
きへそものゝこゝろをそなへつげしゆくらかへし
えふもれくるしは太上天皇になずらふ御位
えうよ門のおとゝは太政大臣夕霧は中納言に
雲井がめのとの夕霧を六位すくせといひし
やうやう中納言になりて蘇芳紅色の夕霧
おもなりわつれきくは藤をそし

こきむらさきのいろとかけきや

あさ

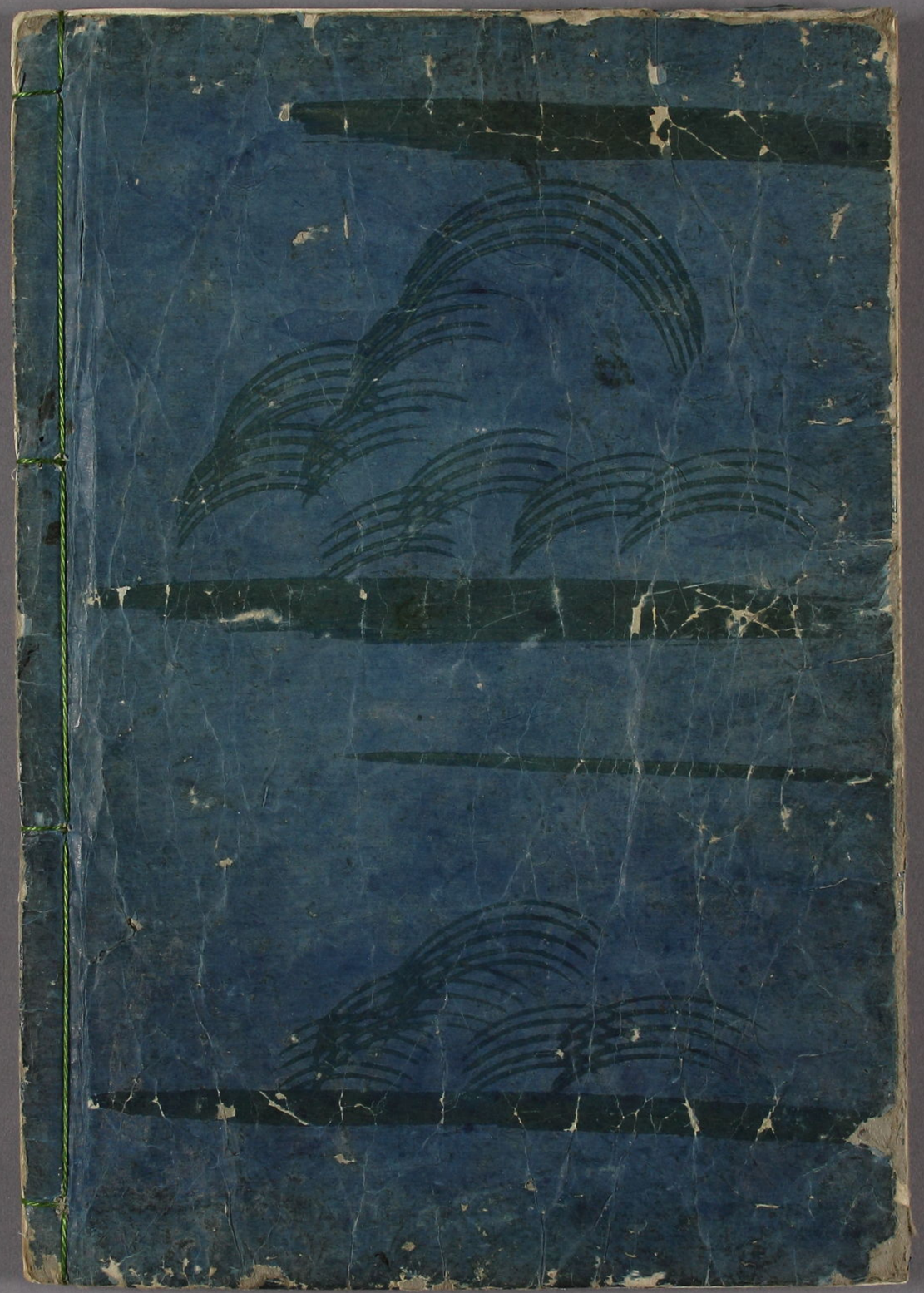
くさむらなるこそおもく菊の上に
おさなきいろとく菊をなかりしき
夕霧ハ三条殿のあさきいろをいひてわる
まらうど若葉のうち気をとおもひなかりし
なれそハ宮わりなし人乃
ゆへハ花や宮ぬしぬ

哥

なき人のかげふみてつまなくて
うつおやからいつき井めぐ

又

おもひしに伸しくおもふつるまそひ
そのちりうかゆらんしく

それうちの世の中ハむかしをくちおらん
へし小松をおけ世のふかり
名をの
まで
いはひかけしぞたのむ二葉よ里
ねさしかはせる松のすゑ
弥生月廿のおほうに六条わたりまかり
院しおりもして馬ばの折ごに左右のつぎ
乃内るひさびさ人て五月ぬせらしおやかう
きてまての池よみどりをうけてうちのむさめ
なんでかの世江て神の御まへのりけらん
おさらか中ハ色とくして中門といりさき
はらんせきをえ業かる様してんよのかゝえ

奉つゝまつる　涼
名乗まる御がきぬきくもあかりくに
社もうけし松とうつし
大路居尾
まうさ北のかたにまで箱のそれ
みうりなきせぬかりそえる
涼
松と色てきくまとすりのりの里人も
かりみ永劫の初めなそえも
中
よのつねのまつりやえるゆ乃
たのもしひけり庭乃ふしきさや